

栃木県有機農業推進

# 公開ほ場事例集

～ No.3 ～



平成25年12月

栃木県農政部

## はじめに

有機農業は、農業の自然循環機能を増進し、農業生産活動による環境への負荷を大幅に低減するほか、安全かつ良質な農産物に対する消費者のニーズに対応するものです。

そのため、国においては、平成18年12月に有機農業推進法を制定し、我が国における有機農業の確立と発展を図ることとしました。

また、本県では、有機農業を総合的かつ計画的に推進するため、平成21年3月に栃木県有機農業推進計画を策定しました。

本計画では、「有機農業に取り組みやすい環境づくり」「有機農業に関する技術の開発と普及」「有機農業に対する消費者の理解の促進」「有機農産物等の流通・販売の促進」の4つの基本目標を掲げ、平成21年度から5か年計画で有機農業を推進しています。

その具体的な施策の一つとして、生産者への有機農業技術の紹介や消費者への有機農業の理解促進のため、県内の各地域毎に公開ほ場を設置しています。(平成21、22年度8ヶ所、平成23、24年度7ヶ所)

公開ほ場は、県内の有機農業の篤農家のほ場で設置しており、県内で行われている有機農業について、ほ場ごとに年2回開催している見学会を中心にその技術を紹介していただいています。

本県の有機農業に関する試験研究については、平成21年度から農業試験場で栽培試験を実施しておりますが、まだ有機農業の栽培技術は体系化されていません。

したがって、本冊子は、体系化され実証された技術を紹介するものではなく、これまでの事例集と同様、平成24年度に公開ほ場を設置した有機栽培農家の技術を紹介するという性格のもので

す。本冊子が、今後有機農業を始める生産者の方、あるいは、すでに有機農業を行っている生産者の方の参考となり、県内の有機農業栽培技術の向上が図られ、県内の有機農業がよりいっそう推進されることを祈念します。

# 目次

水稻（上三川町）	1
水稻及び野菜類（日光市）	3
水稻・酒米（益子町）	5
ねぎ（下野市）	7
露地野菜（那珂川町）	9
野菜（大田原市）	11
さつまいも（足利市）	13
有機農業に関する情報	15

## 栽培暦中の記号等について

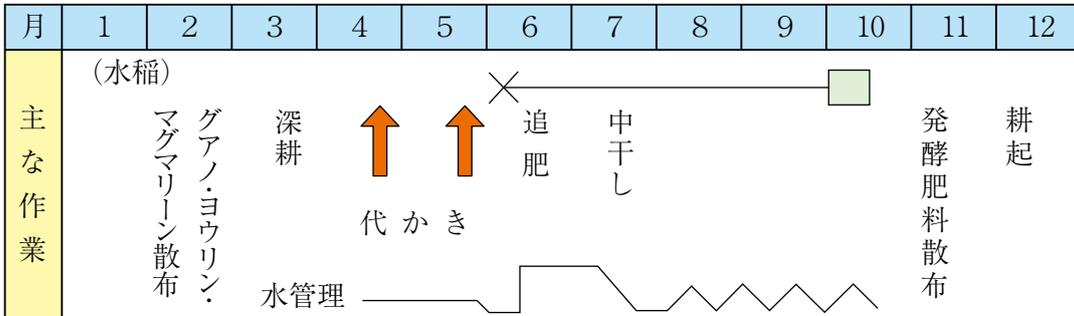
表の中の作型模式図の記号は次のとおりとします。

○ 播種      × 定植      □ 収穫時期

有機栽培でも低コスト・省力化が実現できることを実証する

【稲葉 光國 氏】

栽培暦



有機農業の栽培技術

土づくり・施肥

前作が終了した後の秋と翌年の春に、次のとおり施肥した。

- (秋)・発酵肥料 100kg/10a
- (春)・グアノ 20kg/10a
- ・ヨウリン 20kg/10a
- ・マクマリーン 10kg/10a

移植直後は、米ぬか、くず大豆ペレットを20~60kg/10a施用した。

6月に、追肥として発酵肥料を20kg/10a施用した。

病虫害防除

病害の防除のため、温湯種子消毒、低温浸種、低温催芽を行った。

上記の土づくりを行い、健全苗を選び疎植(一株当たりの植付本数が1~2本)した。

生き物の豊かな栽培環境をつくり、害虫以外の虫の生育を促した。

雑草防除

移植一か月前の代かきで、雑草の種子を表層に移動させて発芽を促し、土中に埋没する種子量を削減した。発芽したものは2回目の

代かきによって浮かせて除去した。

移植直後に米ぬか・くず大豆ペレットを散布し、7cmの水位を保つことにより、雑草の発芽を抑制した。

田の表面をアミミドロやウキクサで覆い、雑草の発生を抑制した。



平成24年度公開ほ場の様子

収量や病虫害発生状況等

水管理を徹底したため、収量に影響がない程度に雑草の発生を抑えることができた。アミミドロやウキクサの発生が順調であれば、更なる雑草抑制効果が期待できる。

収量は、469kg/10aであり慣行栽培と同程度であった。

有機栽培に転換して4年目となる水田においては安定して500kg/10a程度の収量が得られる。

## 今後の課題

場所や土壌、その年の気候によって、雑草防除や病害虫防除の効果が異なってくるため、状況に応じた対策が必要となってくる。

年間を通じて多様な生きものが生息し、豊かな生態系が形成されるため、雑草及び病害虫発生抑制効果が期待できることから、大豆、麦との輪作体系をとる。

また、より質の高い有機農業を目指し、有機培土による育苗技術を検討している。

## 流通

稲葉氏は、日本の稲作を守る会の会員農家となっており、会へ全量出荷している。出荷された有機米は、会から会員消費者へ販売されている。

また、取扱店のよつ葉生協との共催により、田植え、生き物調査、稲刈り等の体験型イベントを年間を通して開催し、消費者との交流やPRを積極的に実施している。



田植えの指導を行う稲葉氏



生き物調査

## 経営

- ・経営面積（有機栽培）740a
  - 内訳 水稲 220a
  - 小麦 260a
  - 大麦 50a
  - 大豆 210a
- ・労働力 家族 2人
- 雇用 3人

## 普及性

深水管理と2回の代かきによるアミミドロ、ウキクサの発生促進技術の確立や、米ぬか・くず大豆ペレット肥料の有効活用、生き物の豊かな栽培環境をつくり病害虫の発生を抑制したことで慣行栽培と同程度の収量が得られたことから、普及性は高いと考えられる。

(河内農業振興事務所)

## 自家製堆肥を用いた土づくりによる健康な農作物づくり

【駒場 誠一氏】

栽培暦

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
主 な 作 業	(水稲)												
	(野菜)												

栽培品目詳細 水稲（コシヒカリ） トマト（桃太郎） ミニトマト（アイコ）  
 さつまいも（紅あずま、紫芋等） さといも（八つ頭、京芋、花咲芋、トイモ等）  
 にんじん（金時、黒田五寸） かぼちゃ（坊ちゃんカボチャ、南部一郎等）

### 有機農業の栽培技術

#### 土づくり・施肥

元肥は、水稲は自家製堆肥を3.1t/10a、野菜は自家製堆肥を4.6t/10aとかき殻石灰150kg/10aを施用した。

自家製堆肥は、おから、もみがら、米ぬか、公設市場から仕入れた魚のあら及び野菜くずを処理して作成した。

追肥は、作物の生育に合わせてなたね油かすを施用した。

#### 病害虫防除

病害の発生を抑えるため、適期栽培及び上記の土づくりをしっかり行った。

上から灌水しないことが病害の抑制になるため、プール育苗とした。

病害対策として、野菜は輪作とし、更に、葉物野菜及びトマトは雨除け栽培とした。

害虫対策として、蒸れることが懸念される夏期を除き、防虫ネットを利用した。（葉物、キャベツ、ブロッコリー）

水稲では、カメムシの被害を抑えるため出穂後の畦畔の草刈りをしなかった。

#### 雑草防除

マルチ栽培が可能な作物は黒マルチを行い、それ以外の作物は管理機除草、刈払機により除草した。それでも抑えきれない雑草は手取りを行った。



プール育苗



雨よけハウス

## 収量や病害虫発生状況等

収量は、ほ場整備後から5～6年間、堆肥による土作りをしたことで安定してきており、本年度も例年どおりの収量が得られた。(堆肥の施用量は、水稻：3.1t/10a、野菜：4.6t/10a)

プール育苗を行うことで地上病害を抑制できた。ただし、プール育苗は、土壌伝染性病害が発生した場合は被害を拡大する恐れがあるので注意が必要である。

葉物野菜やトマトは、雨よけにしたことで病害の発生を抑制できた。

今後の対策が必要なものとしては、白菜の根こぶ病、野菜全般に発生するハスモンヨトウ、ヨトウムシ、アブラムシ、カメムシである。

## 今後の課題

気候の温暖化のためか病害虫の発生が年々増えており、その対策を優先的に検討する。

## 流通

直売所の他、レストランやホテル、スーパーの直売コーナーなどに出荷しており、販売先は多岐にわたる。

口コミで取引先が増え、現在は注文をこなすのが精一杯となっている。したがって、新たな販路開拓は考えておらず、新たな大口取引は断っている。

## 経営

### ・経営面積

有機栽培 水稻200a、野菜160a

慣行栽培 水稻115a

### ・労働力 家族 2人

雇用 1人

取引先が多く、安定した取引がなされていることから、経営的には安定している。

## 普及性

土づくりには時間がかかるため、有機栽培を開始してから収量が安定するまで数年を要する。

雨よけ栽培、防虫ネット、輪作、管理機や刈払機による除草は、直ぐに導入できる。ただし、輪作の組み合わせについては経験が必要である。

プール育苗は、夏の暑い時期に水に漬けたままにすると根が傷むため、水から引揚げる作業をこまめにできる労働力確保が必要である。

さらに、病虫害に強い品種の選定に経験が必要である。

## その他（公開ほ場見学会）

宇都宮短期大学附属高等学校調理科の生徒や非常勤講師などが参加。有機栽培の野菜や米のおいしさに感動し、料理に使ってみたいとの意見が多かった。



平成24年度有機農業推進公開ほ場第1回見学会の参加者。

(上都賀農業振興事務所)

農業と生きもの・自然との共生

「カブトエビ」による除草

【藤田 芳氏（藤田至善農園）】

栽培暦

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
主な作業	(水稻)											
					播種5月10日	↑	耕起6月4日 代かき6月8日 田植え6月9日				収穫10月15日	

栽培品目詳細 水稻（酒米品種：ひとごち）

有機農業の栽培技術

土づくり・施肥

前年秋に、稲わらと自家製堆肥を軽トラ1台分（約350kg/50a）施用後、レタスを栽培し、その後に雑草・収穫残さ（前作のレタス）をすき込み、酒米を作付けた。

自家製堆肥は、落ち葉（原発事故以前に収集）と米ぬかを数年かけて熟成させた。

病害虫防除

作物を健全に生育させることで病害虫の発生を抑制するため、上記の土づくりをしっかり行った。

また、健苗を選び、疎植（40株／坪）した。

雑草防除

カブトエビを水田に放つことで除草した。

なお、カブトエビの卵が流れないように、代かき時の落水はしなかった。

カブトエビは、定着までに3年を要したが、除草作業にかかる労力を大幅に削減させている。

少雨・水不足により一部浅水になった場所に

雑草（コナギ）が少し残ったが、本年度もカブトエビは例年並みに繁殖し、チェーン除草※は行わずに済んだ。

※チェーン除草：角棒等にチェーンをのれん状に接続し、植条に沿って人力牽引する。



働き者のカブトエビ

## その他の栽培管理

カブトエビに必要な水を確保するため中干しはしない。



7月下旬の様子

## 収量や病害虫発生状況等

収量は、10aあたり520kg（8.6俵）で、平年よりやや少なかった。

カメムシによる斑点米が見られたが、その他の病害虫による被害は見られなかった。

## 今後の課題

当該ほ場は、過去にコシヒカリを作付けした時に、無肥料で9～10俵以上収穫できていたことから、地力があると考えられるが、酒米品種「ひとごち」の場合は、収量が低めであった。

例年よりも収量が少なかった1因として、穂数が少なかったことがあると考え、来年は穂数確保のため、植付本数を増やす予定である。

## 流通

県内酒造会社と全量契約し、販売している。

## 経営

- ・経営面積 水稲220a（うち酒米50a）  
野菜類280a
- ・労働力 家族 3人

## 普及性

藤田至善農園は有機栽培28年目、有機物を長年すき込んで土づくりが行われてきたため、毎年の堆肥投入量も比較的少ない。水田での除草労力も最小限で、無理なく水稲の有機栽培が可能になっている。

水稲の有機栽培では雑草対策が一番のポイントになっているが、当該ほ場ではカブトエビが定着し、田植え直後から発生しているので、除草作業を実施しなくとも、生育に影響するほどの雑草の発生は見られていない。

カブトエビは発生条件が限られるため、人為的に導入しても定着しにくく、除草技術としては体系化されていないのが現状であり、導入に当たっては、生態・特性に合わせた環境づくりや栽培管理について、十分な検討が必要と考えられる。

（芳賀農業振興事務所）

病害虫の発生しにくい環境をつくり、農作物を健康に育てる

【関 次夫 氏】

栽培暦

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
主 な 作 業	(夏秋ねぎ)												
			○	×	—————							■	

栽培品目詳細 夏秋ねぎ (品種：ホワイトスター)

有機農業の栽培技術

土づくり・施肥

元肥として、次のとおり施肥した。

- ・牛糞堆肥 3t/10a
- ・緑肥 (ソルゴー) のすき込み
- ・自家製ぼかし堆肥100kg/10a (3月15日)

追肥として、米ぬかボカシペレット (2.88-4.78-2.37) 100kg/10aを、5月30日、6月18日、7月4日の3日に分けて施用した。

病害虫防除

病害虫の発生を抑制するため、上記の土づくりをしっかりと行った。

地域の気候に適した病害虫に強い品種を選定し、作付けた。

雑草防除

手取り除草を随時行い、ほ場周辺はガスバーナー、条間はカルチを用いて除草した。

収量や病害虫発生状況等

夏期が高温・少雨であったため病害虫の発生が懸念されたが、黒斑病及びアザミウマ類の被害が散見されたものの、病害虫の発生状況としては平年並みであり、収量についても平年と同様2t/10aを確保できた。

ただし、定植後のヨトウムシによる食害が年々目立つようになってきているため、今後は対策が必要である。



ほ場の様子 (10月上旬)



アザミウマによる食害

## 今後の課題

定植後のヨトウムシによる食害が年々目立つようになってきたこと、手取りで行っている除草作業の労力について、対策を検討する必要がある。

## 流通

宅配サービス並びに通信販売を行う有機農産物取り扱い業者及び契約取引を行う生協へ販売している。

## 経営

### ・経営面積

有機栽培 ねぎ80a  
ほうれんそう185a  
小松菜165a

慣行栽培 水稲107a

### ・労働力 家族4人、雇用2人

ねぎの収量については、慣行比約8割とやや少ないが、契約単価が慣行比約1.4倍となっていることと、経営費が約6割に抑えられていることから、経営的には安定している。

(参考) 経費等の聞き取り調査

	収量 (kg/10a)	単価 (円/kg)	粗収益 (円/10a)	経営費 (円/10a)	所得 (円/10a)
有機栽培 (夏秋ねぎ)	2,037	330	672,210	150,000	522,210
慣行栽培 (秋冬ねぎ)	2,500	242	605,000	271,040	333,960

## 普及性

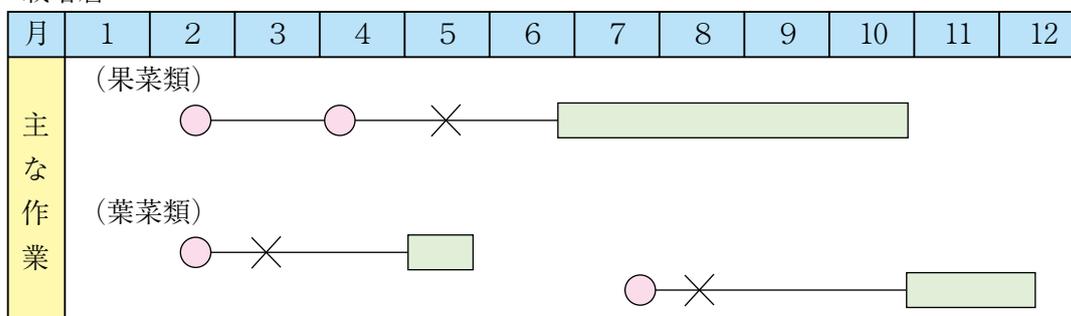
担当農家は輪作を基本とした作付体系を組んでおり、連作をしないなど、病害虫が発生しにくい環境づくりに取り組んでいるため、参考になる点が多い。除草作業について、労力が軽減されれば普及性がより高まると考えられる。

(下都賀農業振興事務所)

## 野菜の多品目栽培

【車 庄三 氏】

栽培暦



栽培品目詳細

果菜類：トマト、なす、ピーマン等

葉菜類：キャベツ、レタス、ブロッコリー等

## 有機農業の栽培技術

## 土づくり・施肥

土づくりとして、前作終了後に発生した雑草をすき込み緑肥とした。

施肥は、鶏糞を用いており、前作の状況や生育状況により量を変えている。平成24年産においては、作物により異なるが0～400kg/10aを施用した。

## 病害虫防除

害虫に対しては、捕殺の他、天敵の定着を目的にバンカープランツの植付け、増殖抑制を目的とした混作を行った。

害虫及び病害に共通の物理的防除として、べたがけ資材を利用した。

## 雑草防除

雑草防除は、収量の大幅低下にならないよう注意しながら必要最小限で実施している。かぼちゃ等はリビングマルチを実施している。

## 収量や病害虫発生状況等

病害虫の発生により収量が半減することもあるが、その場合には代替の品目を出荷することで、販売を継続している。

また、中山間地での栽培のため、鳥獣害の被害も収量を減少させる一因となっている。

## 今後の課題

病害虫、雑草及び鳥獣害の発生や冬期に栽培できる品目が少ないこと等から、安定生産ができていない。

現在は、販売予定数量の3割増しで作付けしているが、予定数量に達しないことがある。

したがって、病害虫等の防除技術の確立や効果的な鳥獣対策を行うことが課題である。

また、慣行農業と比べて労働時間がかかり、省力化の取組みも必要である。

## 流通

個人宅配による販売及び飲食店への販売（個人宅配：飲食店＝7：3）が主体であるが、収穫量が多かったときは量販店へも販売している。

個人宅配は、少ないロットでの直接販売であり、販売経費がかかる（運送費等が割高となる）ため、高単価で購入してくれる販売先の確保が重要である。

## 経営

- ・経営面積 100a
- ・労働力 1人

露地野菜の少量多品目栽培では、労働力1人で栽培面積100a程度が限界である。

### 経営の状況

	販売金額	所得
1年目	76万円	-27万円
2年目	270万円	135万円
3年目	300万円	183万円

## 普及性

新規参入し、少量多品目野菜の有機栽培に取り組んでおり、生産及び販売が安定しないところに課題がある。

担当農家は、苦勞はしているものの、創意工夫により経営を成立させている。

有機農業が普及することは、自然環境の保全や中山間地の遊休農地の利活用にも繋がる。そのためにも意欲ある有機農業者の営農を支援していく必要がある。

## その他（公開ほ場見学会）



公開ほ場担当農家を講師として、有機農業研修会を開催した。

（塩谷南那須農業振興事務所）

米ぬか主体のぼかし肥料だけで野菜を栽培

【北原 実 氏】

栽培暦

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
主な作業	(レタス) 											
	(ブロッコリー、スティックセニョール) 											
	(とうもろこし、かぼちゃ、トマト) 											
	(にんじん、ほうれんそう) (直播)											

有機農業の栽培技術

土づくり・施肥

米ぬかを主体としたぼかし肥料（EM肥料）を250kg/10a施肥した。

病虫害防除

トマトにおいては、病害発生を目的に雨よけとした。



雑草防除

播種前にビニールマルチで被覆し、熱により初期雑草を抑制した。その後は、管理機により中耕培土を行った。

収量や病虫害発生状況等

トマトのカビ病などが散見されたが、夏期の高温により繁殖が抑制されたため、大きな影響はなかった。

その他の病害虫の発生については、とうもろこしにアワノメイガ等の食害が発生したが、出荷調整時に食害部分を切り落として対応したため、影響を最低限に抑えられた。皮をむいての出荷により、消費者からの反応は良かった。



播種前のビニールマルチ被覆は、夏期の草取りが必要ない程度に初期雑草を抑制し、農作物の初期生育が順調に進んだ。



## 今後の課題

個人の農家としては、少量多品目での経営として成り立たせているものの、販売面を考慮すると、各作目毎の量が安定して確保される必要がある。それを改善するための担当農家の案の一つとしては、地域で有機農産物が生産されるよう直売所の仲間に有機農業を広めたいとのことである。

## 流通

地域の直売所「きらり佐久山農産物直売所」で販売しているほか、市内の道の駅やスーパーにも出荷している。

有機農業での栽培を開始した頃は、収量等が不安定であったが、管内のホテルの協力もあり、そのホテルに、「こだわり野菜」として販売していた。

## 経営

- ・経営面積 580a
  - 有機栽培 300a (露地野菜)
  - 減農薬栽培 280a (水稲)
- ・労働力 家族 2名
  - 雇用 20名 (年間延べ人数)

## 普及性

病害虫防除対策においては、トマト栽培での「雨よけ」の実施のみであるが、栽培する作目、時期や土着天敵の影響が少なくないと考えられるため、当該公開ほ場での栽培技術のみをもって有機農業への転換を判断するのは難しい。

有機農業による栽培では、食害等による品質低下が避けられず、購入する消費者の理解が必要となるが、とうもろこしの販売例では、食害を確認するため皮をむいたことが、消費者に利便性を感じさせる商品となった。

有機農業での経営が成立するためには、継続的な販売先を確保しなければならない。そのためは、消費者へのPR及び「有機農業により生産された農産物」以外の価値を付加する等により、消費者が手に取りやすく、また、リピーターとなるような取組みが必要であると考えられる。

(那須農業振興事務所)

## センチュウ忌避植物（エン麦）を利用したさつまいも有機栽培

【元澤 鋭州 氏】

栽培暦

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
主な作業	(さつまいも)											
				↑ 自家育苗		×				■ 収穫 10月5日		

栽培品目詳細 さつまいも（品種：べにはるか）

## 有機農業の栽培技術

## 土づくり・施肥

前作に緑肥としてエン麦を6月～11月に作付けし、12月にすきこんだ。

定植1ヶ月前の5月に、米ぬか約190kg/10a（窒素成分 約2%）を全面施肥した。

追肥は行わなかった。

## 病害虫防除

センチュウ密度を減少させることを目的に、前作に忌避植物としてエン麦を作付けた。

サツマイモネコブセンチュウに強く、立枯病にも比較的強い品種「べにはるか」を導入した。

数年おきにウイルスフリー苗を購入し、苗の更新を行っている（今年は、自家増殖の4年目の苗を使用）。

## 雑草防除

畝は黒ビニールマルチ、畝間には麦わらを敷くことで、雑草の発生を予防した。

7月に畝間に雑草が少し見えたので、手取除草を行った。



隣接ほ場では、同様に畝に黒ビニールでマルチを行ったが敷きわらをしなかったため、定植後約2週間目から、畝間の雑草を機械除草で4回（6月～9月、毎月1回）行った。

## その他の栽培管理

・自家育苗：3月中旬～6月中旬

ハウスで温床育苗した。有機質肥料として鶏糞等を使用した。土壤消毒は行わなかった。

・定植ほ場への黒マルチ設置：5月1日（定植1ヶ月前）

畝幅60cm、株間30cm

・定植：6月1日

苗長約30cm～50cmで、黒マルチに垂直挿して定植した。

・畝間麦わらマルチ：6月3日～10月5日

・収穫時期：10月5日

・収量 約2t/10a

（収穫前日に黒ビニールのマルチを除去）

## 収量や病害虫発生状況等

7月下旬～8月の少雨（参考：8月の足利市の降水量の平年比12% 気象庁）により、一般的にさつまいもの生育が劣り、畝間を被覆するまで時間がかかった。しかし公開ほ場では、麦わらを畝間マルチに使用したこともあり、他のほ場と比較し、蔓の生育が優れ、茎

葉が畝間を被覆する時期が早かった。

畝間麦わらマルチによって、さつまいもの生育、収量が良好となったことに加え、夏期の畝間除草の労力が省略できた。

害虫のイモキバガ（8月～9月）と、ハスモンヨトウ（9月）が微発生したが、収量には影響しなかったと思われる。

野生動物(カラス、ネズミ等)の食害が一部みられた。センチュウ害の発生は少なかった。

また、前作にエン麦の作付無し、畝間麦わらマルチ無しの隣接ほ場と比較したところ、センチュウ被害が少なく、収量が優れていた。

## 今後の課題

麦わらマルチは、定植直後に畝間に敷かなければならないので、手間・時間がかかり、実施する面積には限界がある。

今年の場合、特に機械除草の回数が少なかったほ場では、畝間の雑草の生育が旺盛となり、さらに少雨の影響で最後までさつまいもの蔓が畑全体を被覆するに至らなかった。

このため、初期雑草対策をしっかり行う事と、麦わらマルチと機械除草を適切に組み合わせた計画的な除草体系を確立する必要がある。

## 流通

有機JAS認証を取得して、それを表示し有機農産物として販売している。

販売先は、主に近隣市町の直売所（道の駅どまんなかたぬま等）に、自分で加工して「干しイモ」としても販売している。農産物と加工品の販売割合は4：6程度である。

## 経営

- ・経営面積 260a（輪作による休耕を含む）  
露地野菜（さつまいも、たまねぎ、にんじん等）
- ・労働力 家族4名

自宅に加工所を設置しており、冬期の加工にパート数名

## 普及性

前作のエン麦すき込みの有無による、センチュウ被害を比較したところ、前作にエン麦を作付けすき込みをした方が被害が少ないことがわかった。労力もかからないことから、センチュウ対策に有効であり普及性はある。

さつまいもの蔓が畝間を覆うまで、初期の除草対策を計画的に行う必要がある。

品種の選択、センチュウ対策、育苗、初期の除草対策をしっかり行えば、酸性土壤にある程度強く、多肥を必要としないさつまいもは有機農業に向いている作物であり、普及性はある。

## その他（公開ほ場見学会）



公開ほで生育状況を観察する出席者（8月）



公開ほで消費者を対象に苗の植え方の説明をする元澤氏（9月）

（安足農業振興事務所）

## 有機農業に関する情報

有機農業に関する情報は、次のホームページを参考にしてください。

### 県が行っている有機農業の推進事業について知りたい

栃木県 【有機農業の推進について】

<http://www.pref.tochigi.lg.jp/g04/work/nougyou/keiei-gijyutsu/yuukitop.html>  
(ホーム > 産業・しごと > 農業 > 経営・技術 > 有機農業の推進について)

### 国が行っている有機農業の推進事業について知りたい

農林水産省 【有機農業】

<http://www.maff.go.jp/j/seisan/kankyo/yuuki/>  
(ホーム > 組織・政策 > 生産 > 有機農業)

### 有機 JAS 規格について知りたい

農林水産省 【有機食品の検査認証制度】

[http://www.maff.go.jp/j/jas/jas\\_kikaku/yuuki.html](http://www.maff.go.jp/j/jas/jas_kikaku/yuuki.html)  
(ホーム > 組織・政策 > 消費・安全 > 食品表示とJAS規格 > JAS規格について > 有機食品の検査認証制度)

## 問い合わせ先

### 栃木県農政部経営技術課 環境保全型農業担当

電話 028-623-2286

### 各農業振興事務所 経営普及部

農業振興事務所	電 話	農業振興事務所	電 話
河 内	028-626-3072	上 都 賀	0289-62-6125
芳 賀	0285-82-3074	下 都 賀	0282-24-1101
塩谷南那須	0287-43-2318	那 須	0287-22-2826
安 足	0283-23-1431		

編集発行／栃木県  
〒320-8501 栃木県宇都宮市埜田1-1-20  
農政部経営技術課  
TEL 028-623-2286 FAX 028-623-2315